

## キズナ強化プロジェクト(派遣プログラム) アクションプラン

福島グループ(福島大学・福島県立医科大学)

No.	アクションプラン詳細
1	<p>【アクションプランタイトル】 ホームステイ先への手紙</p> <p>【活動内容】各自のホームステイ先に手紙を送る。内容としては、日本の防災に関して、ホームステイや大学交流など今回のプログラムを通しての感謝の気持ちを伝える。・感謝の気持ちを伝え、防災意識の高まりを啓発する目的で行う。・各ホームステイ先に行ったペアごとに手紙等を準備し、4月中に送付することを目標とする。</p>
2	<p>【アクションプランタイトル】 活動報告とちぎり絵の掲示</p> <p>【活動内容】私立オトゴンテンゲル大学との共同制作で制作したちぎり絵と、写真を中心としたモンゴルでの活動報告レポートを福島駅に掲示する。写真を中心とした報告レポートの作成は福大、医大両グループ協同で行う。※可能であればレポート、ちぎり絵とともにアンケート用紙を添付し、感想、意見をまとめてJICEを通じてモンゴルの大学に伝える。・写真を集め、活動報告レポートを模造紙等に制作する。JRIに許可をもらった上で福島駅構内に掲示する。掲示は5月中旬を目標とする。また、可能であればアンケートも同時に掲示し、結果はJICEを通じてモンゴル側に伝える。</p>
3	<p>【アクションプランタイトル】 報告会の実施</p> <p>【活動内容】福島大学2グループ、福島医大グループそれぞれで各々の大学構内にて今回の活動の報告会を行い、モンゴルの文化、歴史、災害に関する問題、課題等について感じたことを周囲の人々に知ってもらおう。・アンケートを実施し、感想や意見を集約し、モンゴルの大学生に伝える。周りの友だちにモンゴルについて知ってもらい、そこで得られた感想や意見をモンゴルの大学生と共有する目的で行う。※可能であれば福島大学を中心に、他国の派遣団と合同で報告会を行う。各国の事情、発表を通しての収穫等について広く共有する機会をつくる。・各グループ、大学ごとに報告内容をまとめ、発表会を行う。同時にアンケートも行い、得られた感想や意見はJICEを通してモンゴルの大学生へと伝える。各グループによる報告の準備、まとめは現段階では福島大学グループは4月中、福島医大グループは5月中を目標とする。</p>

No.	アクションプラン詳細
1	<p>【アクションプランタイトル】 日本とモンゴルをつなぐホームページを作る</p> <p>【活動内容】 Why)モンゴルに来て、経験していない災害に対する意識が低いということと、自分たちがモンゴルについて良く知らないことに気付いたため。 When) 帰国後随時 Who) HP開設は宮城大学5人で行う。リンクにより他の10人の活動とも繋がる予定 What)以下の内容を写真、動画を用いて掲載する。モンゴルでの体験談、気付き、ワークショップでの成果(ポスター含め)、復興状況、掲示板(両国) How)無料のHP作成サイトを用いる。言語は日本語と英語で表示する予定。このプロジェクトで繋がった人たちへURLをメールやSNSを通じて拡散する。</p>
2	<p>【アクションプランタイトル】 実際モンゴルに行ってみたらこんな国だった～大学生ver.～</p> <p>【活動内容】 Why)モンゴルに来る前は、自分たちもモンゴルのことを何もしなかった。プロジェクト参加以前の私達のような人に、モンゴルのことをもっと知ってもらいたい。 When)帰国後 Who)東北学院大学5人が中心となって作成。 What)調べてもわからなかったモンゴルの実状を伝えられるようなムービーを作り、モンゴルに対しての知識が浅い人に、私たちの気付きを疑似体験してもらおう。動画の中では私たちが実際に行ってみて知ったモンゴルの様子や日常、気付いたこと、魅力などを紹介する。 How)スライドショーを作る。その中に現地でとった動画を入れることで、その場の空気を伝える。また、YoutubeやFacebookなどを利用するだけでなく、宮城大チームが作成したHPIに載せることで、多くの人に発信する。</p>
3	<p>【アクションプランタイトル】 モンゴルのことを知ってもらおうワークショップ</p> <p>【活動内容】 Why)①来る前はモンゴルのことをほとんど知らなかったが、来て見て知った魅力がたくさんあった。自分達の経験を他の人たちにも知って欲しい。②共同製作として防災ワークショップを行った経験から、ワークショップが参加者の主体性を引き出しながら自分たちの伝えたい事を効果的に伝える良い手段であるということを実感した。 When) 帰国後半年以内 Who) 東北大学5人が中心となって運営。他のメンバーにも協力者として参加してもらおう。 What&amp;How)①東北大学の国際交流サークルなどを通じてモンゴル人学生とメンバーが交流をもち、まずは自分たちから交流の輪を広げる。②モンゴル人学生と日本人学生をつなぐ懇親会を開催し、双方にワークショップをする土台となる人間関係を築いてもらう。③懇親会に参加したモンゴル人と日本人学生を対象にワークショップを開催。簡単な流れの例:モンゴルのイメージを1人の日本人学生に発表してもらい→他の日本人学生の反応→モンゴル人学生の話、キズナ参加者の体験談。このように、トピックごとに日本人とモンゴル人の間にある認識の差を確認しながら、それを埋めていく。共同製作で行ったポスター作製のような、参加者が最後にアウトプットできる場を設けたい。⑤ワークショップ終了後、反省会を行い、次に向けたテーマ設定を行う。また、日本人がモンゴルに抱いているイメージをまとめ、キズナで出会ったモンゴル人の友人たちに送る。というのも、モンゴルの学生から「日本人はモンゴルのことをどう思っているのか」と聞かれることが多かったから。</p>